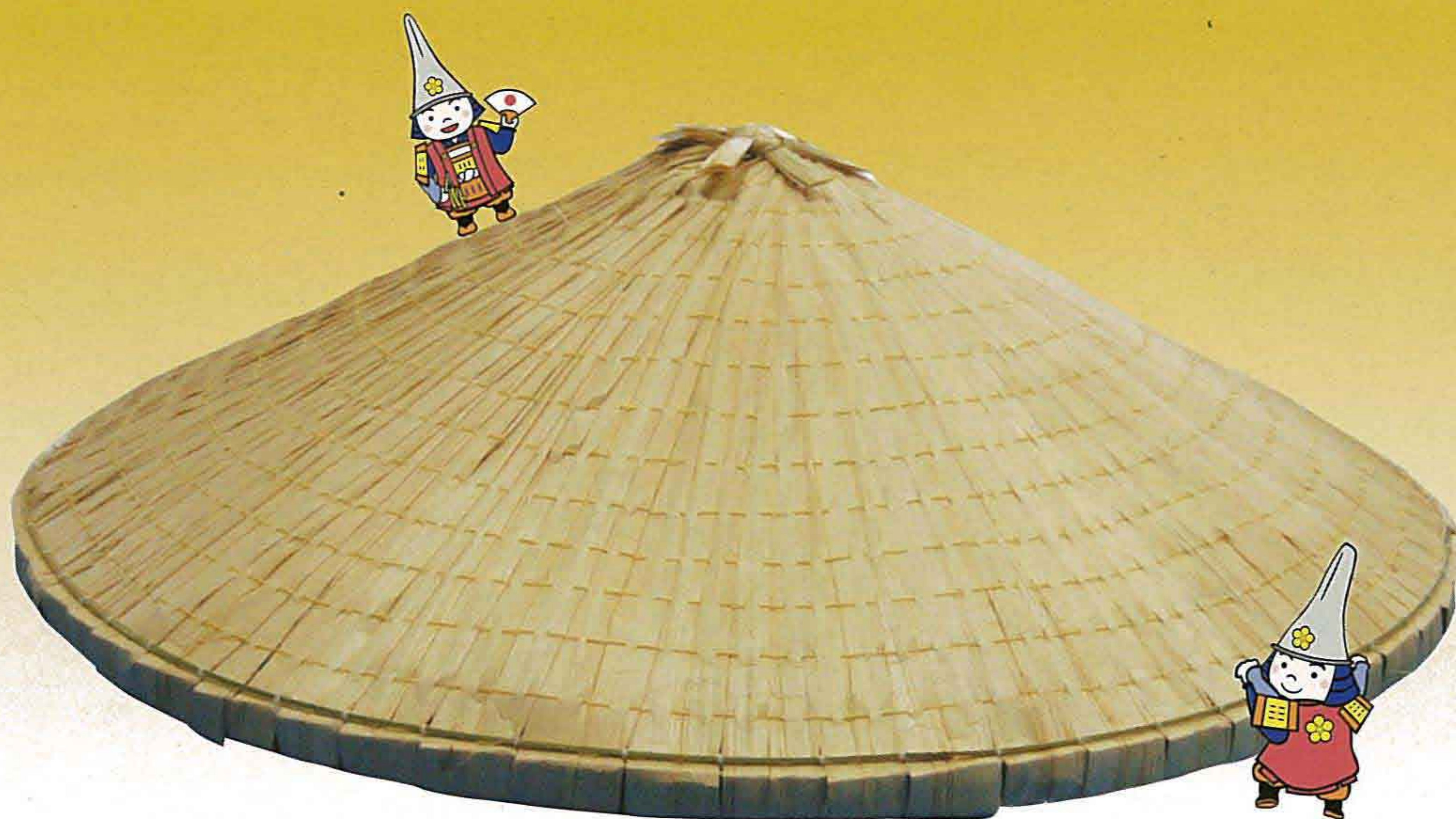




菅笠の作り方

～角笠編～



高岡市教育委員会
福岡教育行政センター

越中福岡の菅笠

越中福岡の菅笠は、江戸時代には「加賀笠」の名で知られ、金沢の間屋を通じて江戸や上方に運ばれていた。この起源については、諸説あり、中世に京の禅僧により伝えられたといわれるものや、江戸時代に伊勢の国から伝わったものなどの様々な説がある。とりわけ、天正13年(1585)11月木舟城下を襲った大地震により生じた沼地や低湿地(液状化によるものか)に自生したスゲを利用し、製作がはじまったとする説は、ドラマチックな由来といえる。

明治時代には、福岡町にも菅笠問屋が増加し、北陸道沿いに建ち並び、鉄道による輸送手段の近代化により全国に販路を広げ活況を呈した。一時は海外にも販路を拡大したが、手技により製作したものにもかかわらず、あまりの出来の良さに機械による製造だとレッテルを貼られ、関税が高くなり採算があわず、泣く泣く撤退したという優秀な技術を誇るがゆえの福岡笠の笑えない逸話もある。

菅笠の製作風景は、小矢部川左岸西山丘陵沿いに菅田が観られ、刈り取りの時期には河川敷などに扇面に広げる菅干し、旧北陸道沿いには菅笠問屋の町並みを観ることができ、高岡福岡町の誇る文化的景観となっている。

越中福岡の菅笠製作技術 国重要無形民俗文化財指定(平成21年3月11日)

保護団体:越中福岡の菅笠製作技術保存会(平成20年10月30日設立 会長木村昭二)

越中福岡の菅笠は、笠骨づくり、笠縫いの全工程を一貫してひとつの地域でおこなっていることから、国重要無形民俗文化財の指定を受けた。

また、特筆すべきは、スゲの栽培や菅干し、菅笠問屋による流通なども維持されており、これらもあいまって福岡菅笠の伝統が維持されているところにある。

現在では、越中福岡の菅笠製作技術保存会も組織されており、官民あげて技術の伝承や発展に取り組んでいるところである。

福岡教育行政センターでの取り組み

当センターでは、平成20年度から福岡地場産業支援教育事業に取り組んでいます。この事業は、福岡地域の菅笠製作技術について広く市民の皆様に体験を通じて知っていただき、菅笠について考える機会を提供することを目的としております。

この体験教室では、菅田において原材料となるカサスゲを育てることにはじまり、笠骨づくり見学会の開催、笠縫い体験教室の開催により構成されており、製作技術の一環を実体験していただいております。

また、教室の実施にあたっては、スゲ栽培、笠骨づくり、笠縫いといった各工程において、農家や職人などの生業とされておられる皆様方を講師としてお招きしております。また、これらのコーディネートを菅笠問屋にさせていただくなど、実際の菅笠生産の仕組みを採り入れています。

角笠について

菅笠の形状は、用途により多種多様であるが、角笠は最も一般的な形態のものであり、農作業をはじめとして広く使われている。初心者が笠縫いに取組む場合には、比較的容易に体験することができるものである。当センター事業では、直径が1尺2寸(36.36cm)の笠骨を用いた。本職の方は、笠を1日3~4枚は縫いあげるようだが、本事業での体験者は、概ね1日半ほどかかっており、細かい工程が多いものとなっている。

本書の位置づけ

本書は、福岡地場産業支援教育事業の教材としての用に限らず、広く越中福岡の菅笠製作技術を学ぼうと考えておられる方々をはじめ、伝統技術に関心のある方などの座右の書としていただければ幸いである。

本書を記すにあたり次の方々のご教示を得ました。

荒山侃子、岸野有三商店(岸野有三、岸野信義)、北島クニ子、木村昭二、木村美雪、
桜栄美西里、笹島哲夫、谷口信子、林ふさ、山田はな子、吉國時正(五十音順敬称略)



本書は、福岡教育行政センター所長網代吉孝、主幹二口博之、副主幹藤田靖子の監修のもと、主任太田浩司が執筆した。

用意する材料 (1枚分)



笠骨(カサボネ) 1個
笠の骨組み



笠紙(カサガミ) 1枚
日よけ、雨よけのため用いられる



小骨 (コボネ) 1本
輪骨(ガワボネ)・菅(スゲ)をおさえる



笠糸(カサイト) 1巻
スゲを縫うのに使います



菅(スゲ) 1束
笠の表面などになります。幅広のものは、笠の表面に使う親菅(オヤスゲ)と呼ぶ。幅狭のものは、仕掛け(シカケ)などに使う仕掛け菅(シカケスゲ)と呼びます。最も細いものはヨリコと呼びます。

ココがポイント

スゲを用いる際は、根元から葉の先端に向けてなでる。逆になでると手が切れます(サカスゲ)。気をつけましょう。



用意する道具



カサボンコ1個
道具入れ



スゲサシ(サシビラ) 1本
スゲを裂くのに使います



コマ 1本
ノズケするのに使います



スゲコキ(コキビラ) 1本
スゲに光沢を出すのに使います

このほかに、
・ハサミ―糸を切るのに使います
・包丁―スゲを切りそろえるのに使います
・霧吹き―スゲを適度に湿らせるため使います
・手ぬぐい―湿らせたスゲを包むのに使います
・ビニール袋―湿らしたスゲを包むのに使います

ここまでが前日までの準備になります



ココがポイント

スゲは、笠縫いをする前日に水道水で濡らし、立て掛けておきましょう。

材料道具は、
福岡教育行政センター高岡市福岡町大滝44
TEL 0566-64-1436にお問い合わせください。



スゲサシ スゲを用途に応じて長さをそろえ、引き裂く



1：シカケスゲの先端を包丁で切り捨て、一定の長さ（ガワボネから笠骨の頂部までの2倍の長さ）に揃える。スゲサシで、スゲの根元から10cm程に写真のように刺していく。



2：スゲの根元をしっかり持ち、先端のほうにスゲサシを滑らせて裂く。



3：スゲを半分ほど引き裂いたら、上下持ち替え残りの部分を同様に裂いて2本にする。



シカケ (ハサンケ) 笠の裏面をつくる



1：シカケスゲを写真のようにナカボネとコガワボネの交点に内側からくぐらせ、一周させ折り返しおさえてとめる（スゲの表が笠の内側になるように）。



2：反時計回りにシカケていくことになるが、2本目のナカボネに外側から1周させ巻きつける。



3：一本後ろのナカボネに写真のように内側から巻きつける。



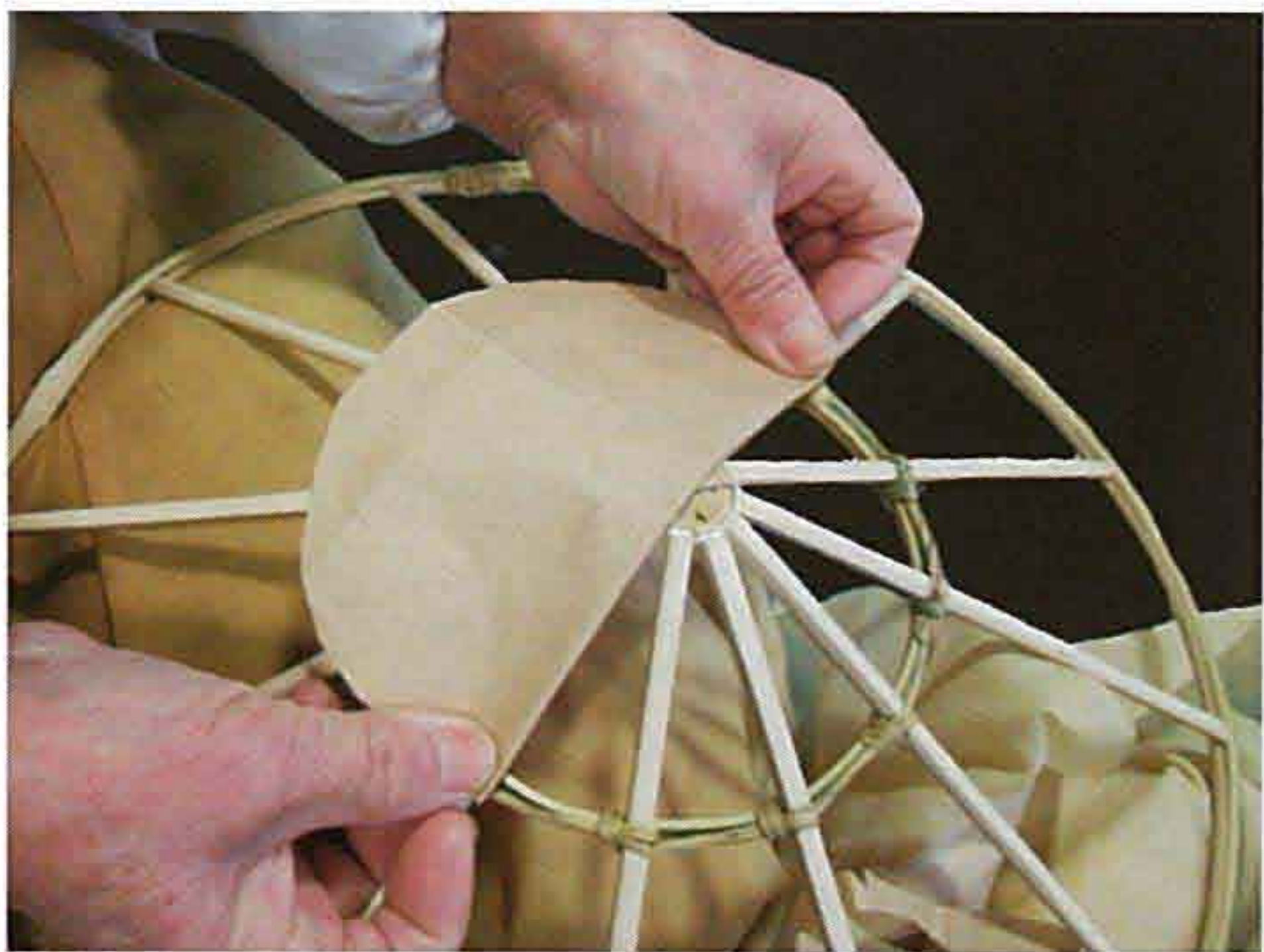
4：シカケ作業工程2から3の作業を繰り返し、コガワボネのまわりに一周させる。



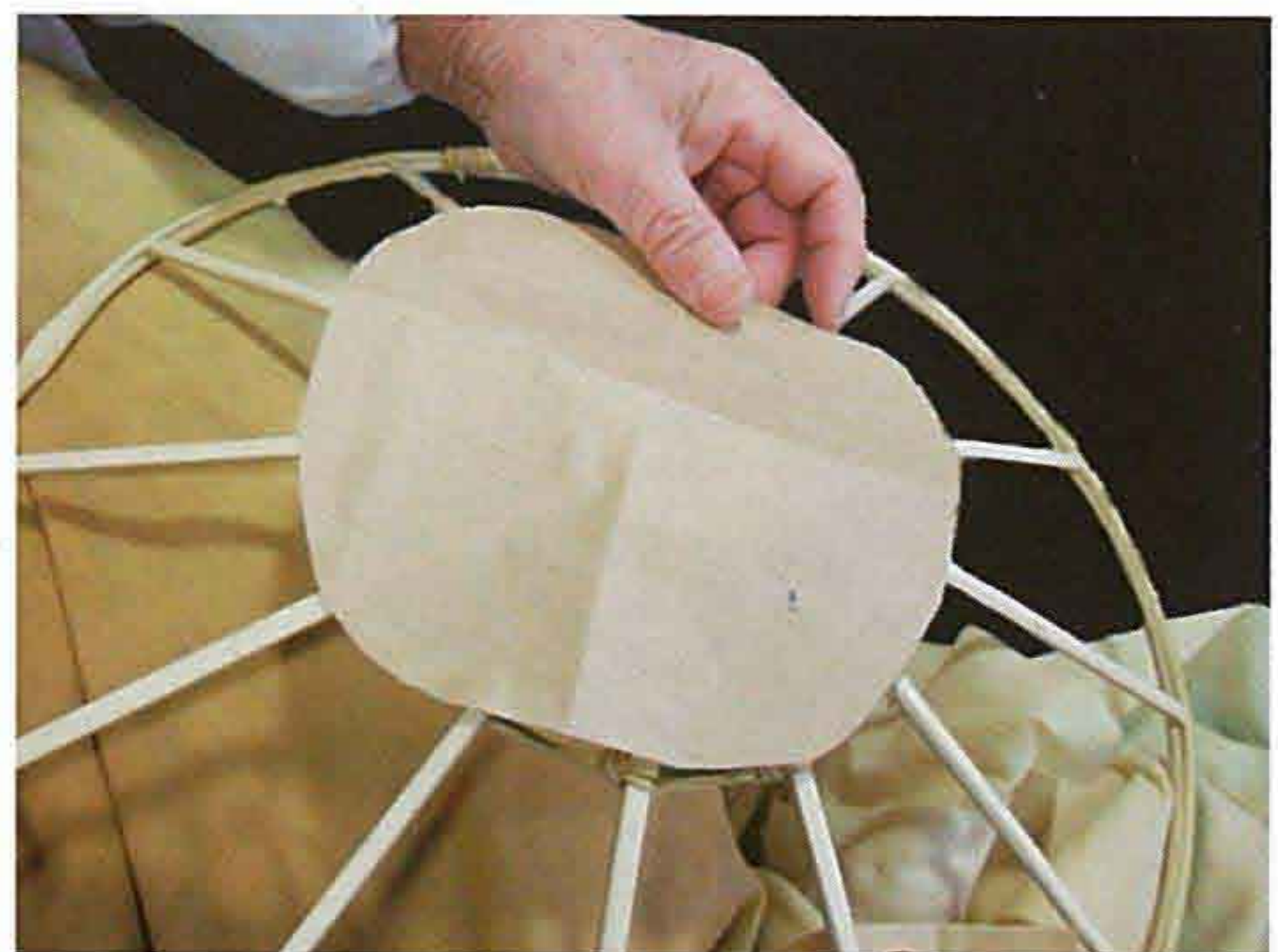
5：シカケ作業工程が途中まで進んだ状態。



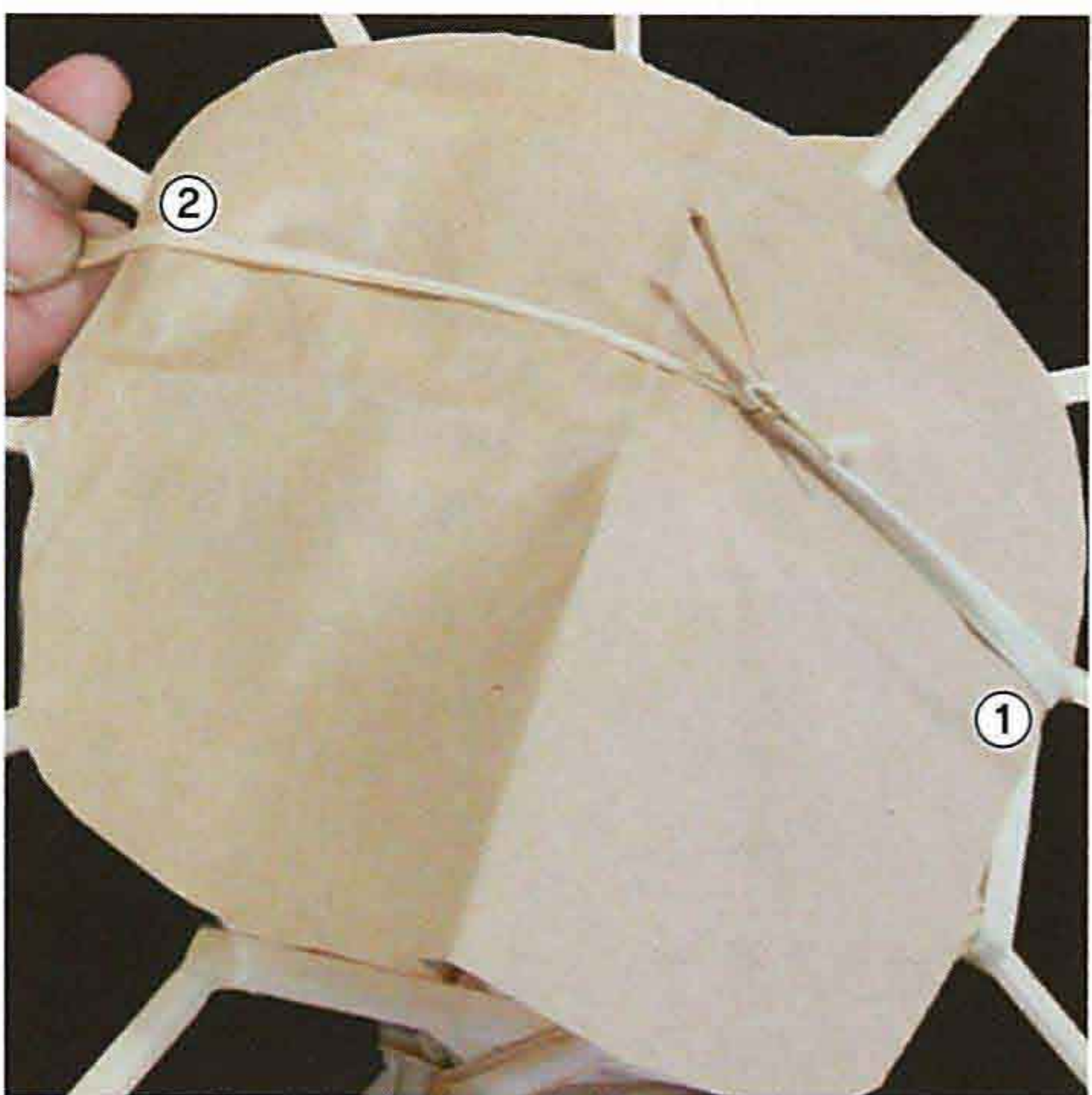
6：コガワボネの周りにシカケ終わったら（ここまでの工程をカコイと呼ぶ。）、シカケスゲを新たに結び、カサガミをとめる準備をする。



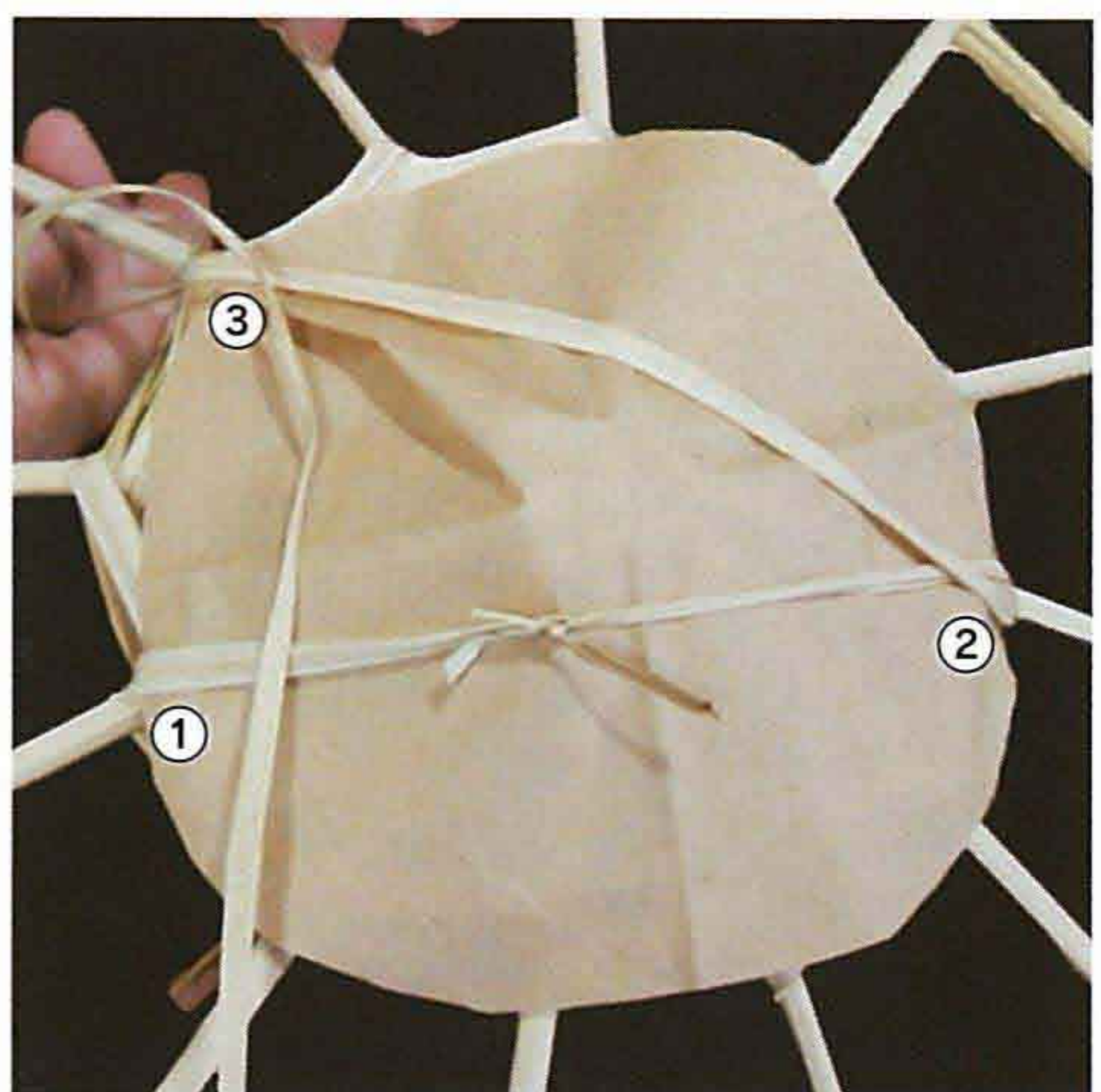
7：カサガミは、コガワボネがちょうど隠れるぐらいのサイズに切りそろえる。



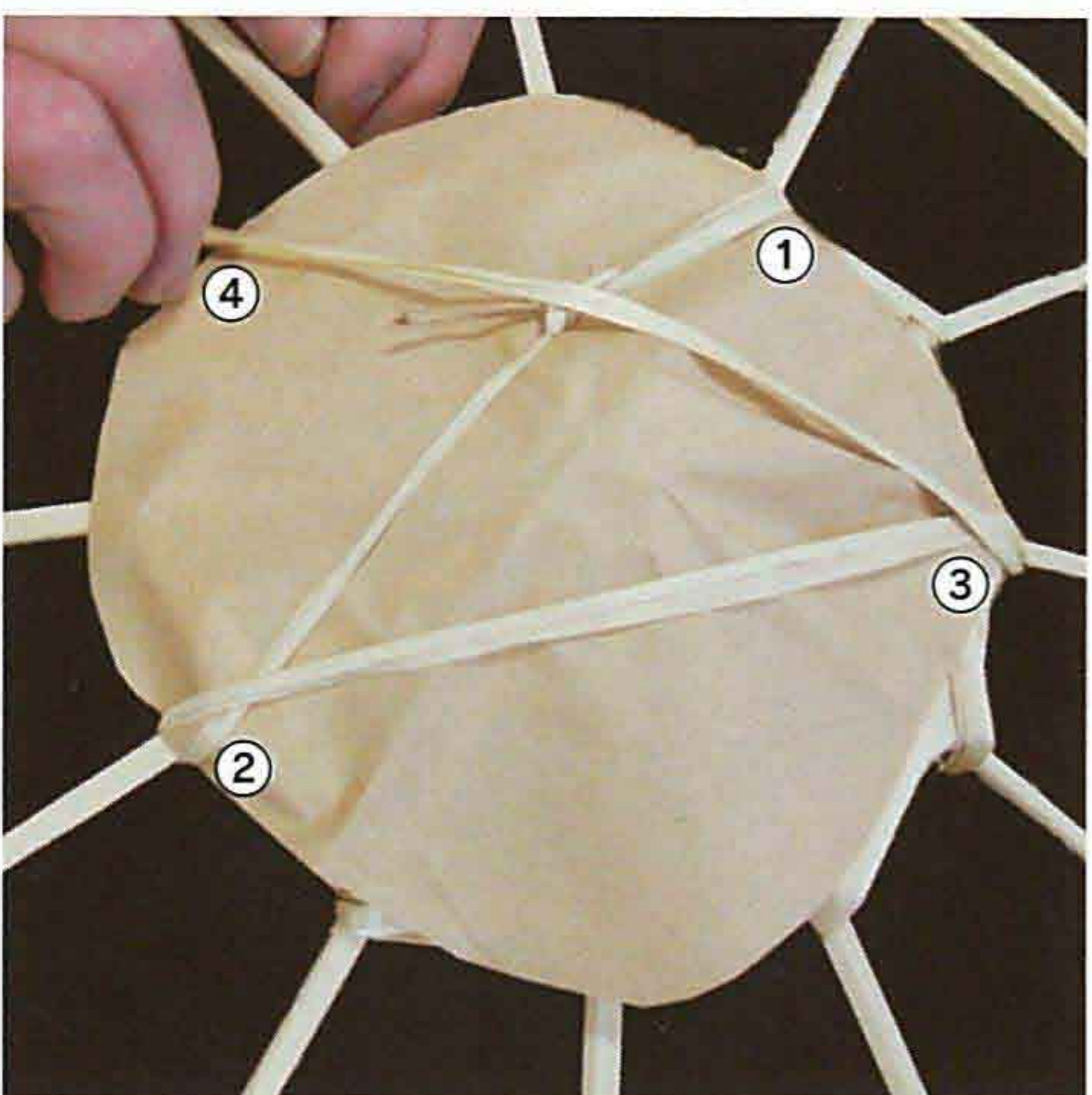
8：カサガミをカサボネにあてる。



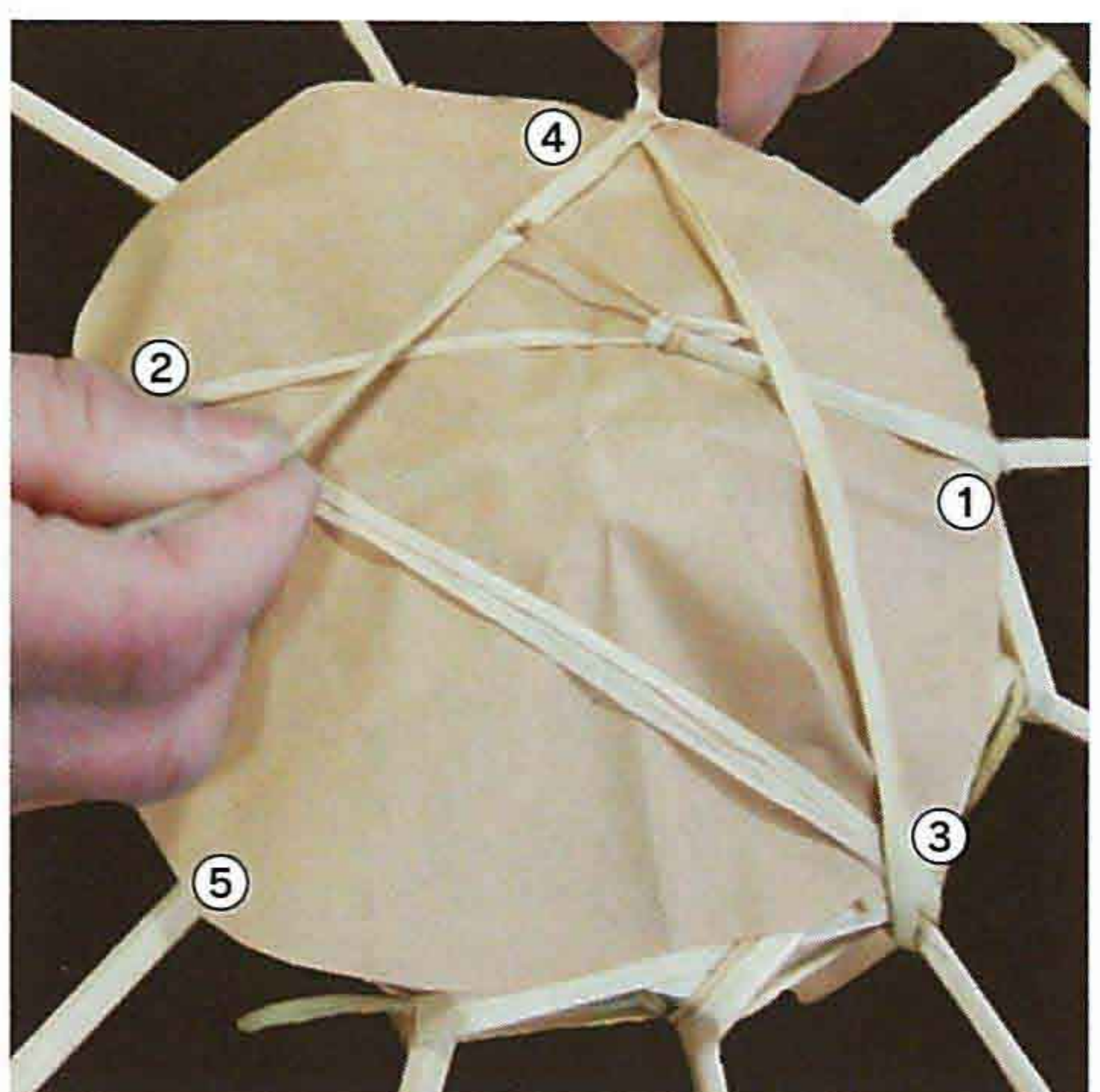
9：シカケスゲを写真のように反対方向に運び、外側からナカボネに1周巻きつける（①→②）。



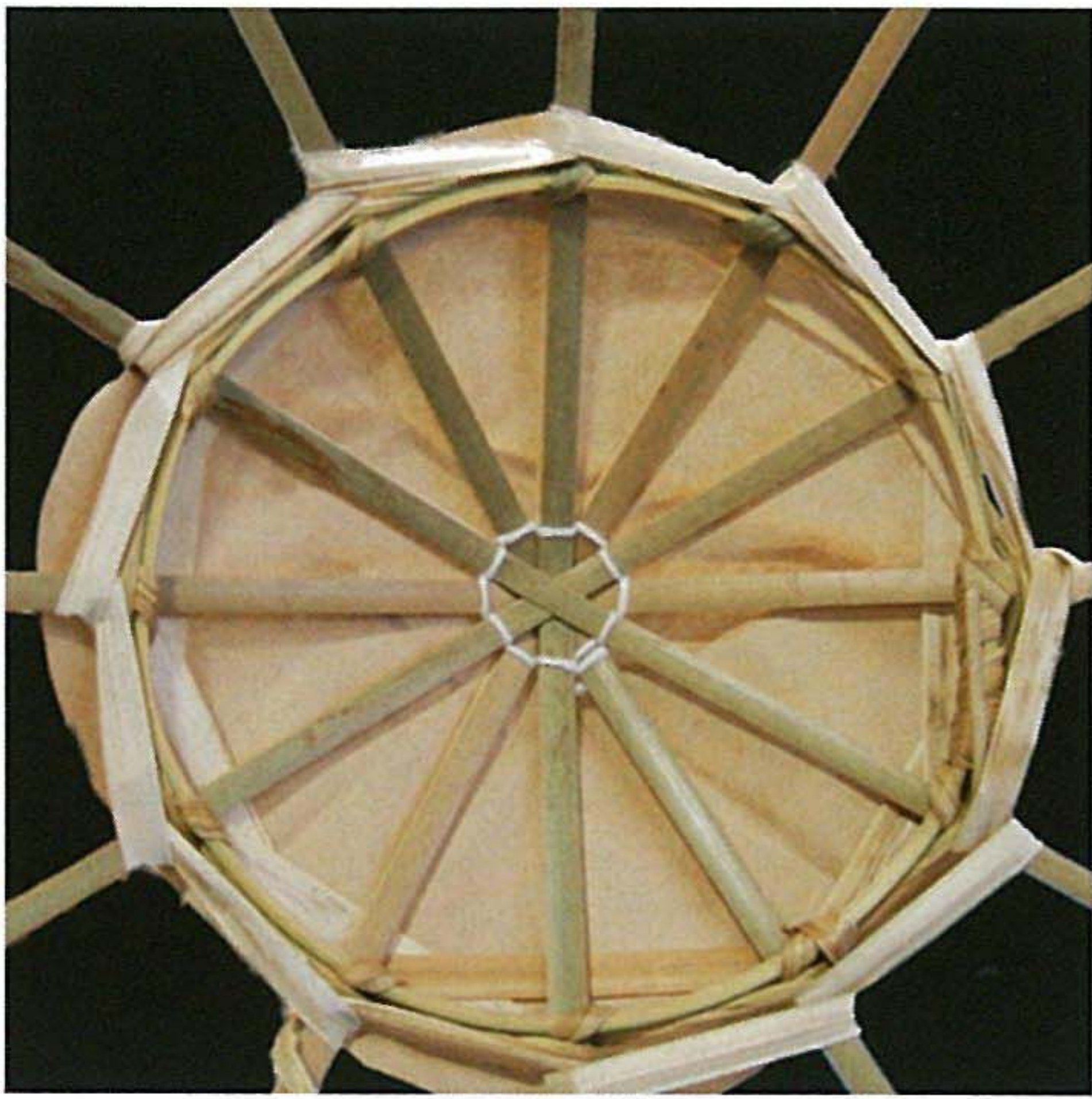
10：写真のように順にシカけていく（②→③）。



11：写真③から④へスゲをはこぶ。



12：カサガミをシカケ終わったところ。



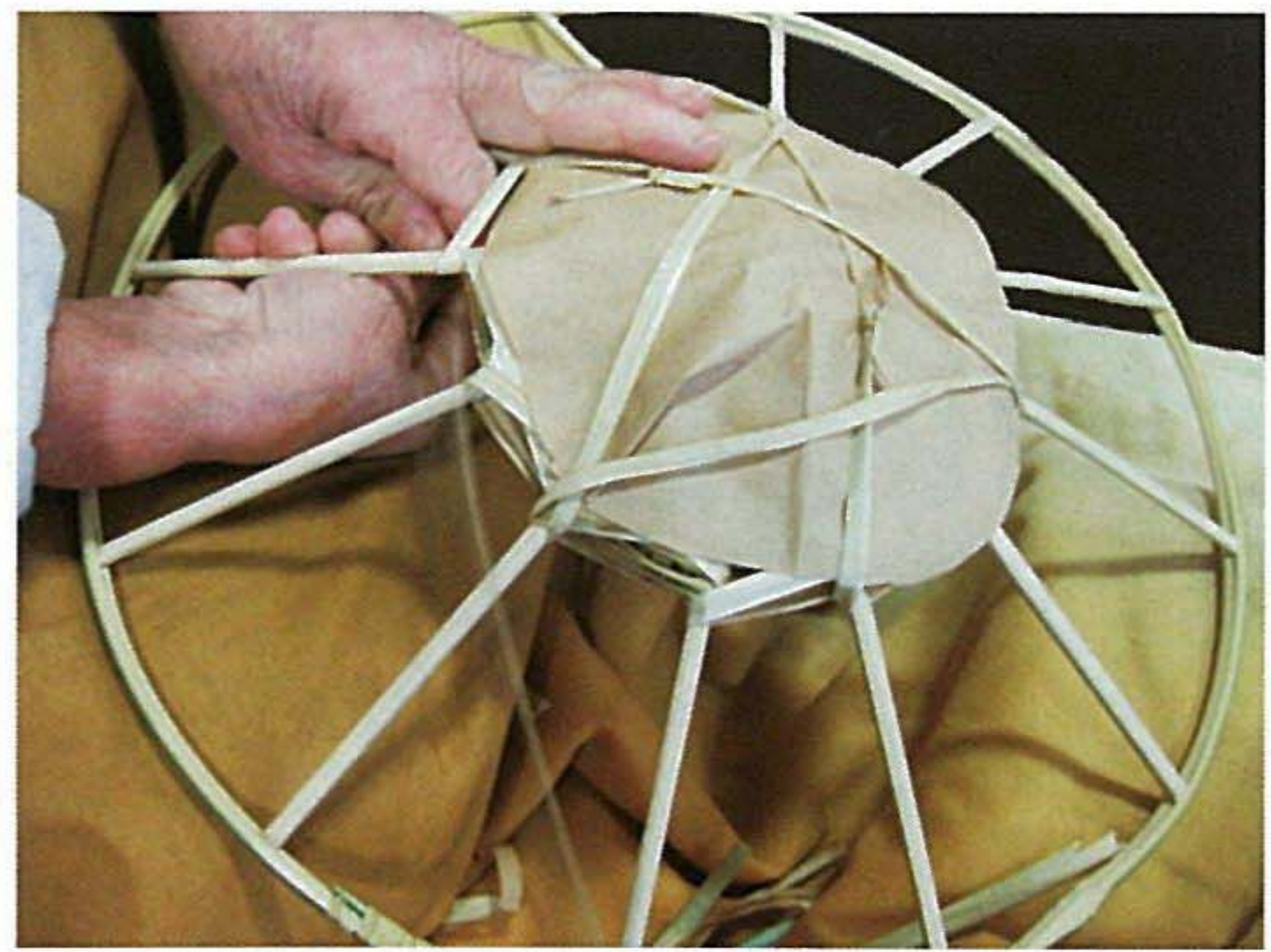
13：コガワボネのまわりにシカケ終わったところを内側からみた状態。



15：続いて、反時計回りに次のナカボネに外側から1周くぐらせ、巻きつける。この工程をガワボネまで繰り返す。



17：ナカボネに外側から1周くぐらせ、さらに1周させループをつくり、最後にもう一度くぐらせた先端をループにくぐらせ引き締めとめる。



14：次に、直近のナカボネに外側から一周くぐらせ巻きつける。

ココがポイント

シカケスゲは、ナカボネにしっかりと巻きつけていきましょう。



16：途中でスゲが足りなくなったら、新たなスゲをガワボネ方向から笠頂部に向け、ナカボネに沿わせ、シカケ途中のスゲでおさえ、シカけていく。



18：シカケ作業が終了したら、外側にみえるシカケスゲを継ぎ足した際の余分な部分をハサミで切り落とす。

ノズケ 笠の表面になるオヤスゲをとりつける



1：ノズケ作業に用いるオヤスゲの根元から約10cmのところにスゲサシを刺し、引き裂く（先端のみ）。

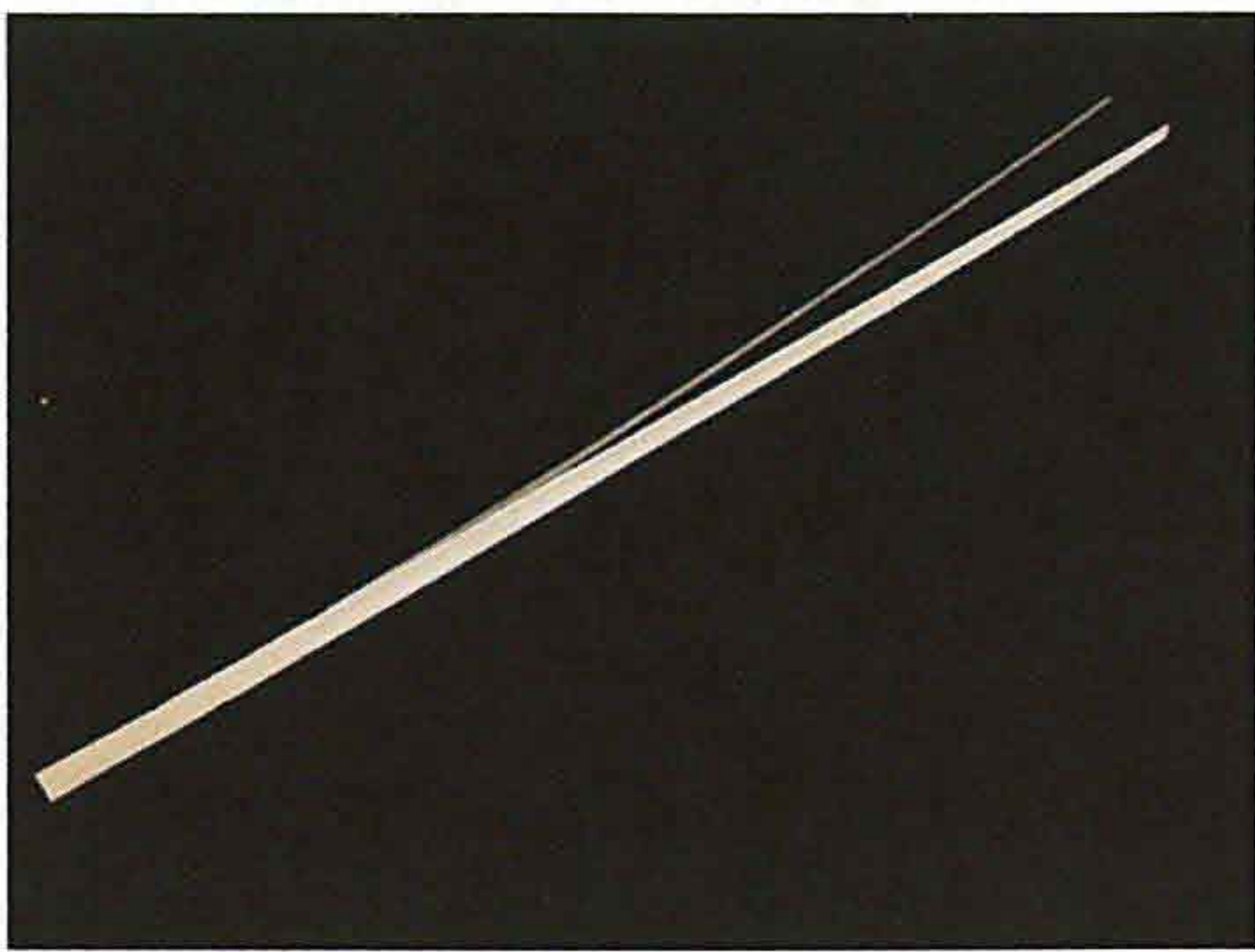
ココがポイント

ノズケ作業に用いるオヤスゲの寸法

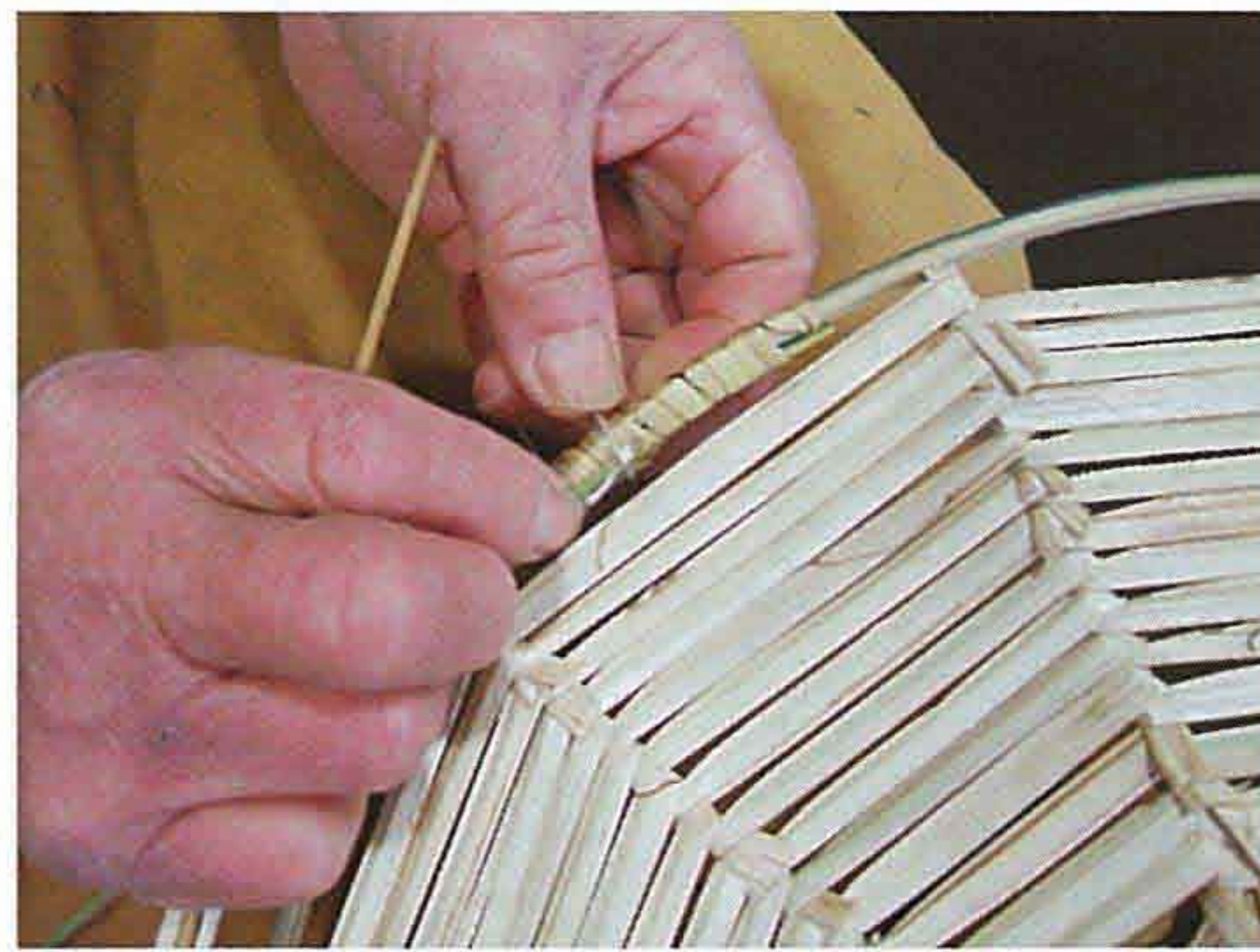


長手は、ガワボネから笠頂部までの2倍+3cmとする。短手は、ガワボネからコガワボネまでの長さ+3cmとする。

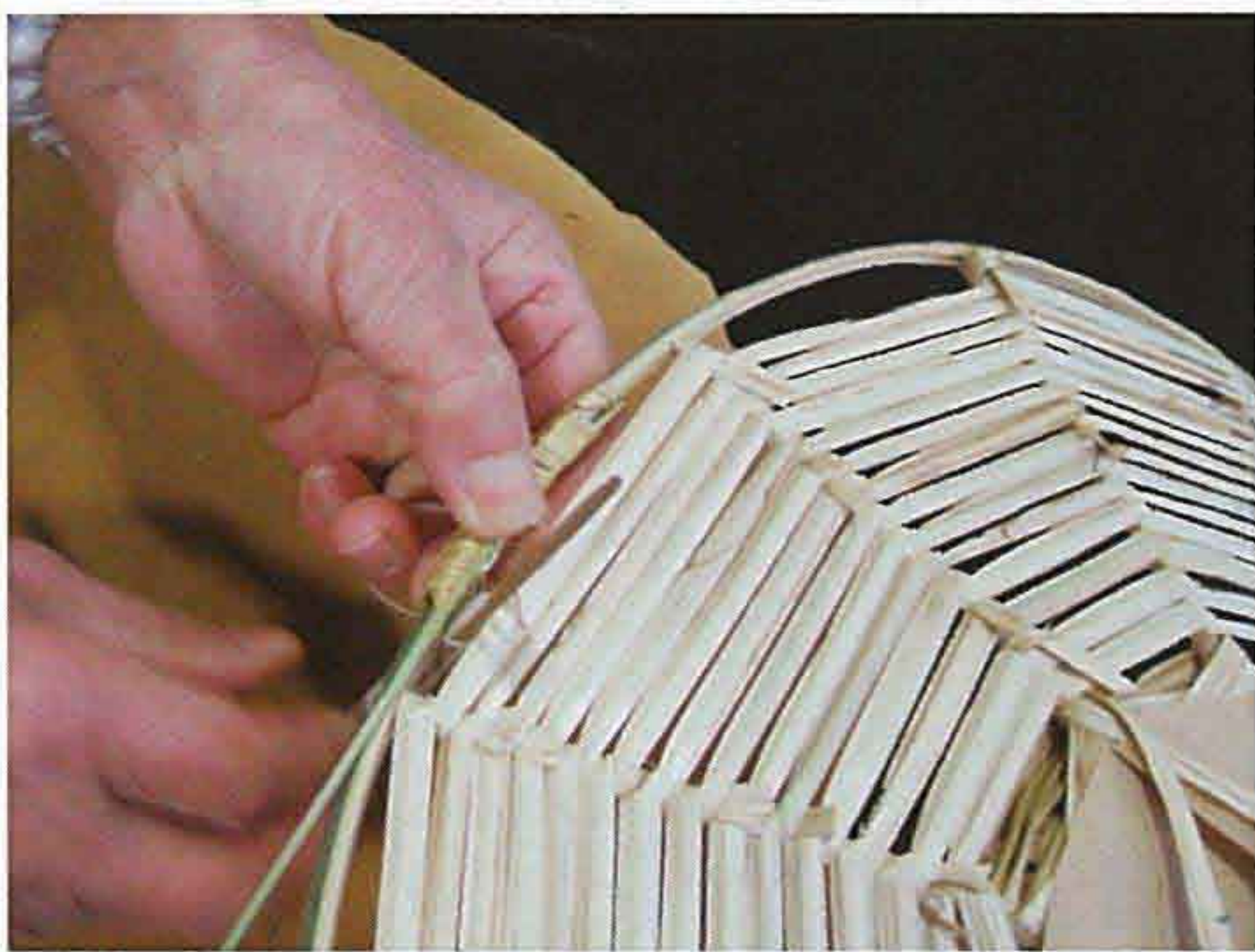




3：スゲサシした状態のオヤスゲ



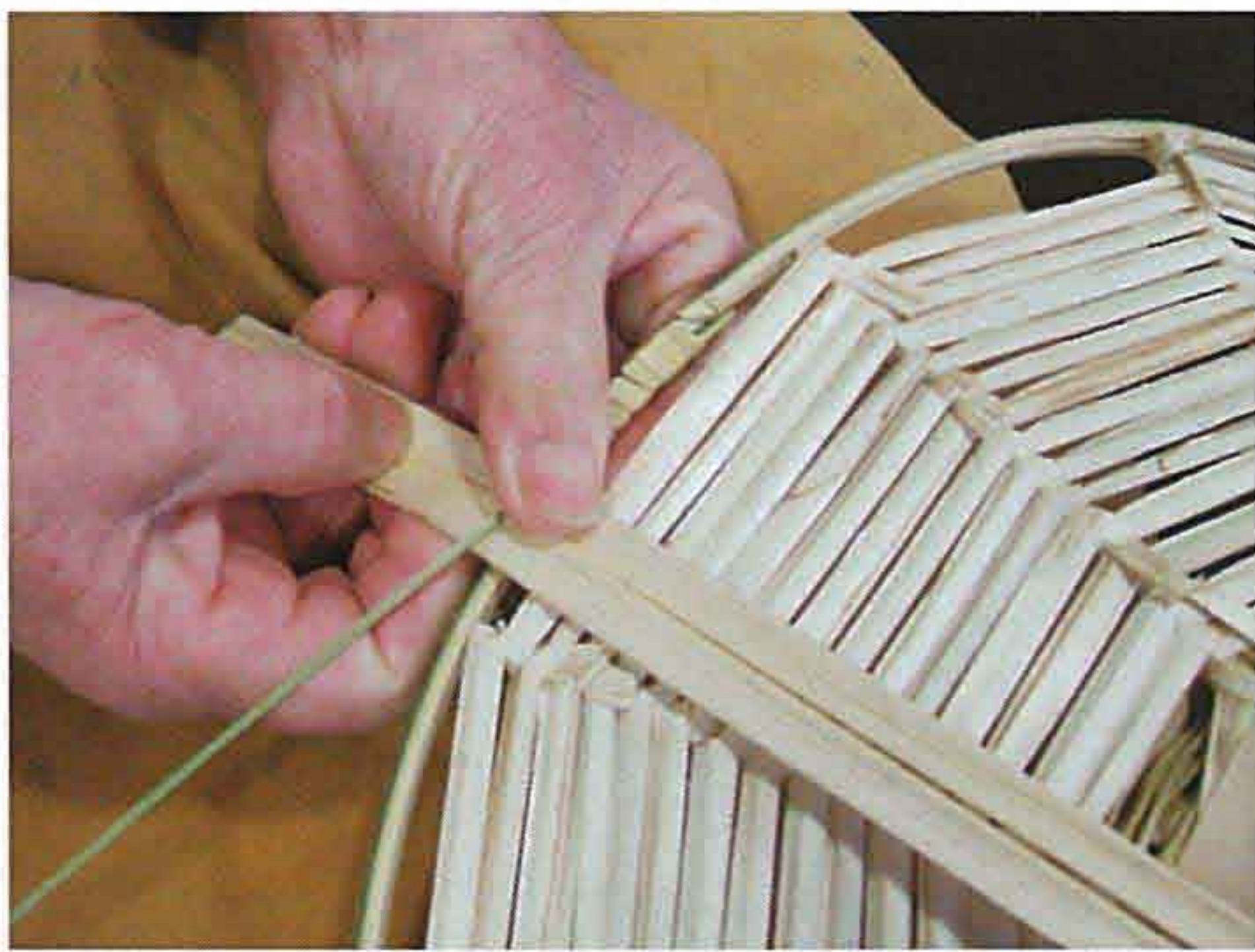
4：コボネに糸を巻きつけ（糸は緩まないようにコボネの根元方向に何度か巻きつけてから先端に向かって巻きつける。）、ガワボネのつなぎ目にあてる。



5：ガワボネに糸を外側から1周くぐらせ、コボネとガワボネをとめる。



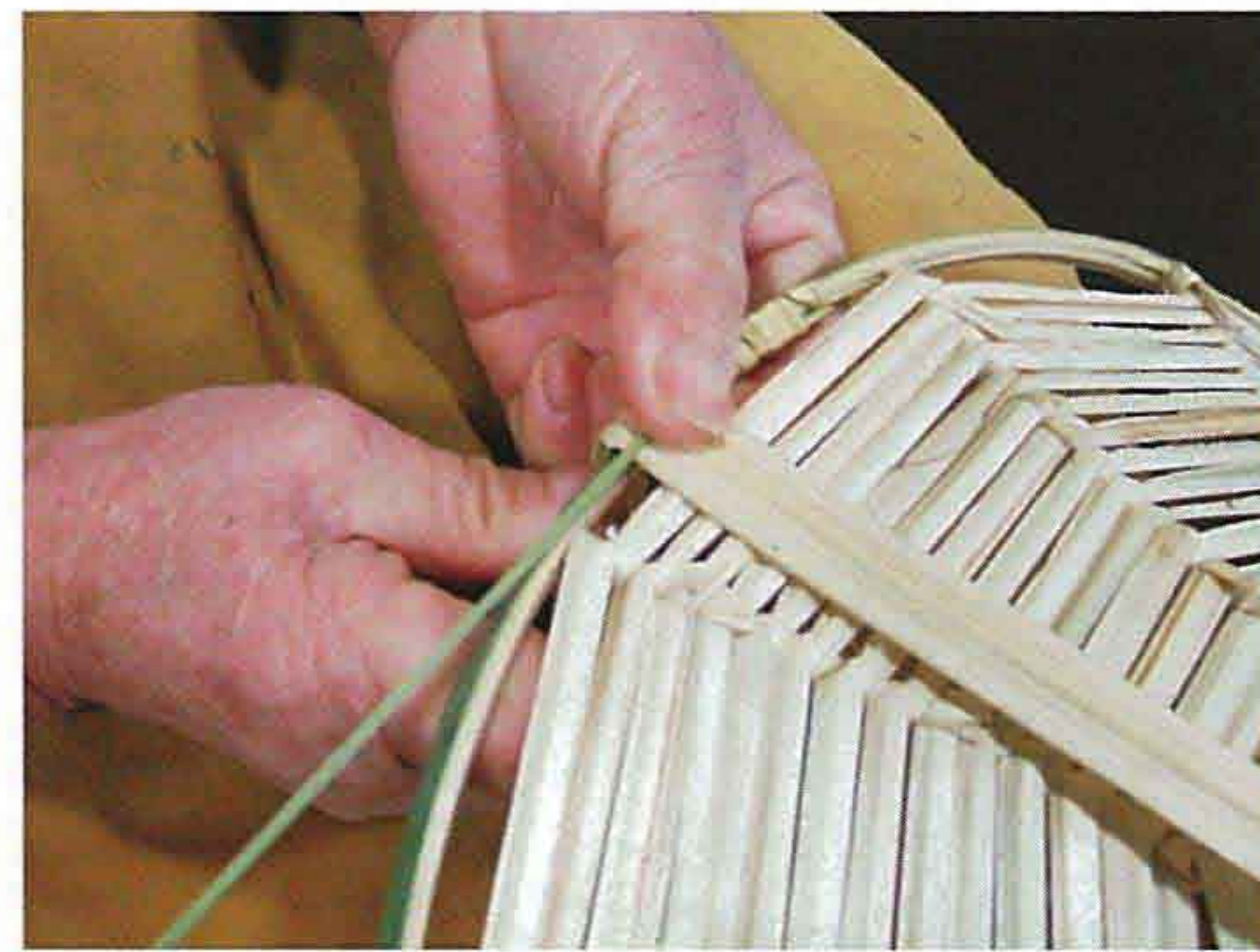
6：ガワボネにコボネを取り付けた状態。



7：オヤスゲをガワボネとコボネの間に挟む（スゲの根元から3cmほどのところ）。

ココが
ポイント

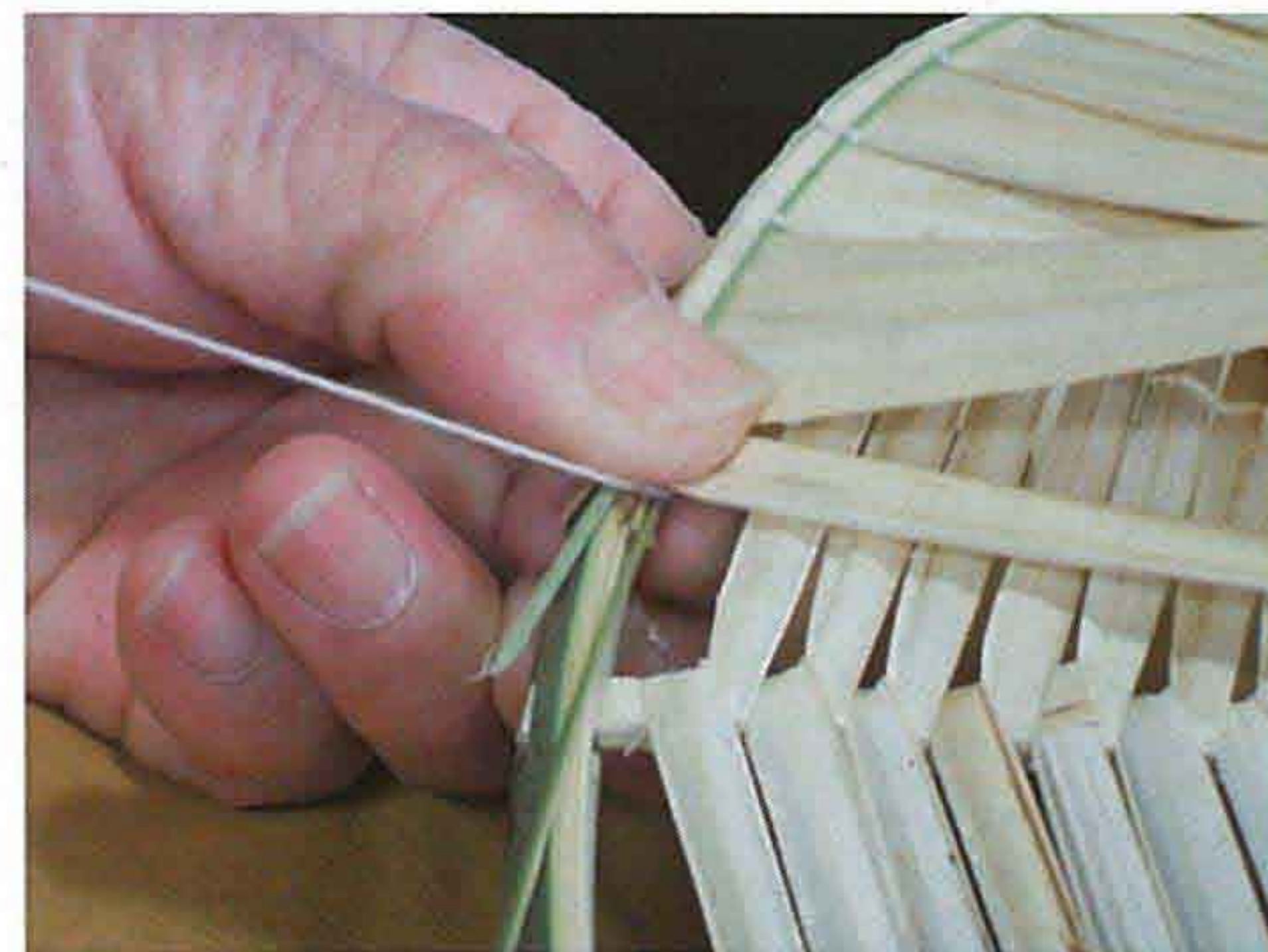
スゲの表面が笠のおもてになるようにする。



8：挟んだオヤスゲを笠の内側に向けて折り返す。



9：オヤスゲを折り返した状態での手元を下から見上げた状態。



10：オヤスゲの脇を内側から外側にコマをまわす。



11：コボネとガワボネの間にコマをとおり、写真のようにガワボネとシカケスゲの間にとおす。



12：写真のようにオヤスゲ、コボネ、ガワボネがしっかりとめられる。



13：スゲの根元を斜めに折り返し、糸をその折り目にそわせ、次のスゲをノズケるために糸を運ぶ。



14：スゲの根元を折り返す。



15：次のオヤスゲを挟み折り返す（前の折り返したスゲと一緒に挟み込む）。ノズケ作業工程7～14を繰り返していく。

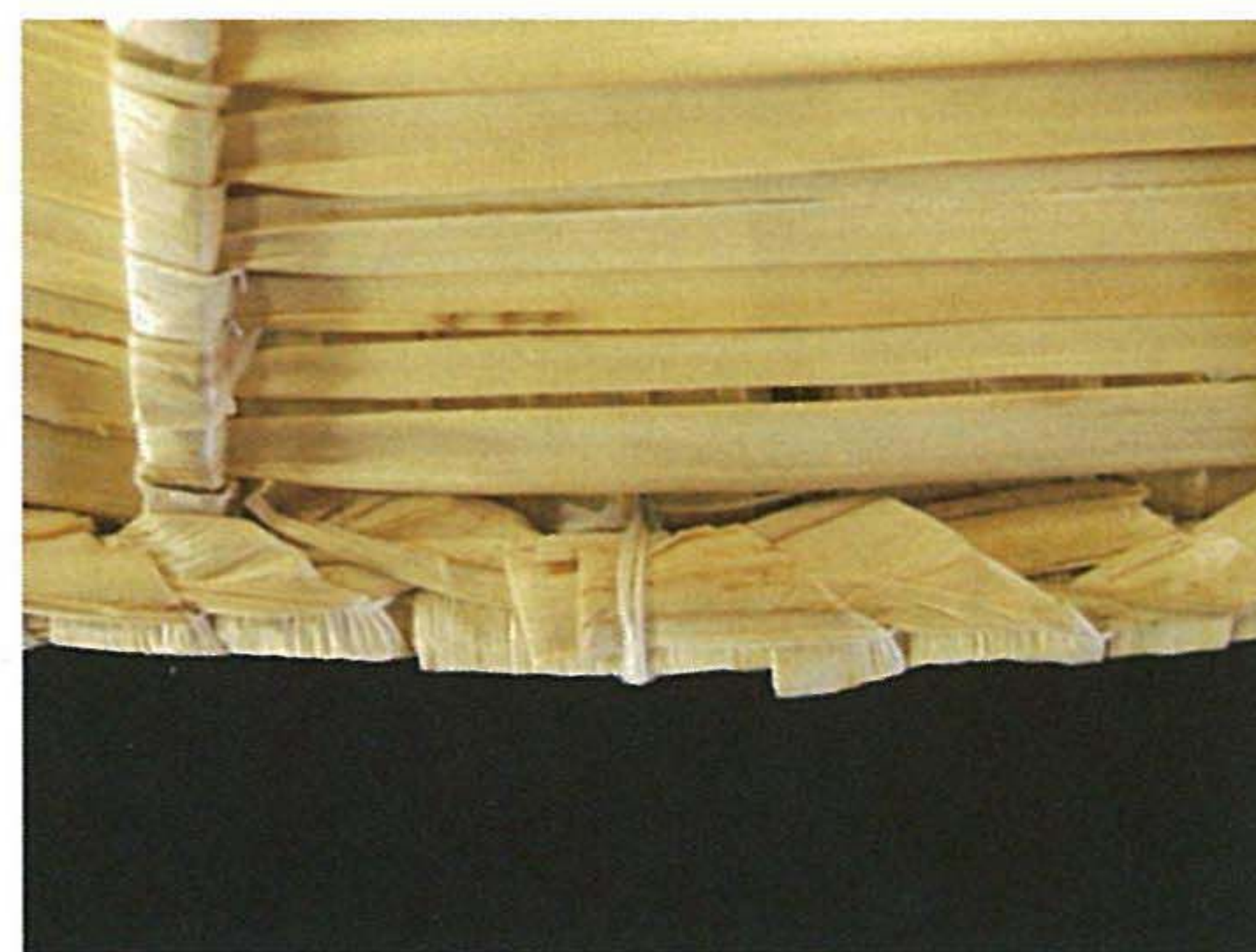


16：ノズケ作業を進めた状態（内側）。

ココがポイント オヤスゲは、長いものと短いものを交互に挟む



17：ノズケをおえたらコマを2周させ糸をとめる。



18：最後に折り返したスゲは写真のように折り返しとめる。

スゲコキ ノズケしたオヤスゲに光沢をだし、柔らかくする



1：ノズケが終わった状態のオヤスゲをガワボネに近い部分から先端に向けて、コキベラを動かし、スゲの表面に光沢をつけ、柔らかくする（内外面ともに）。

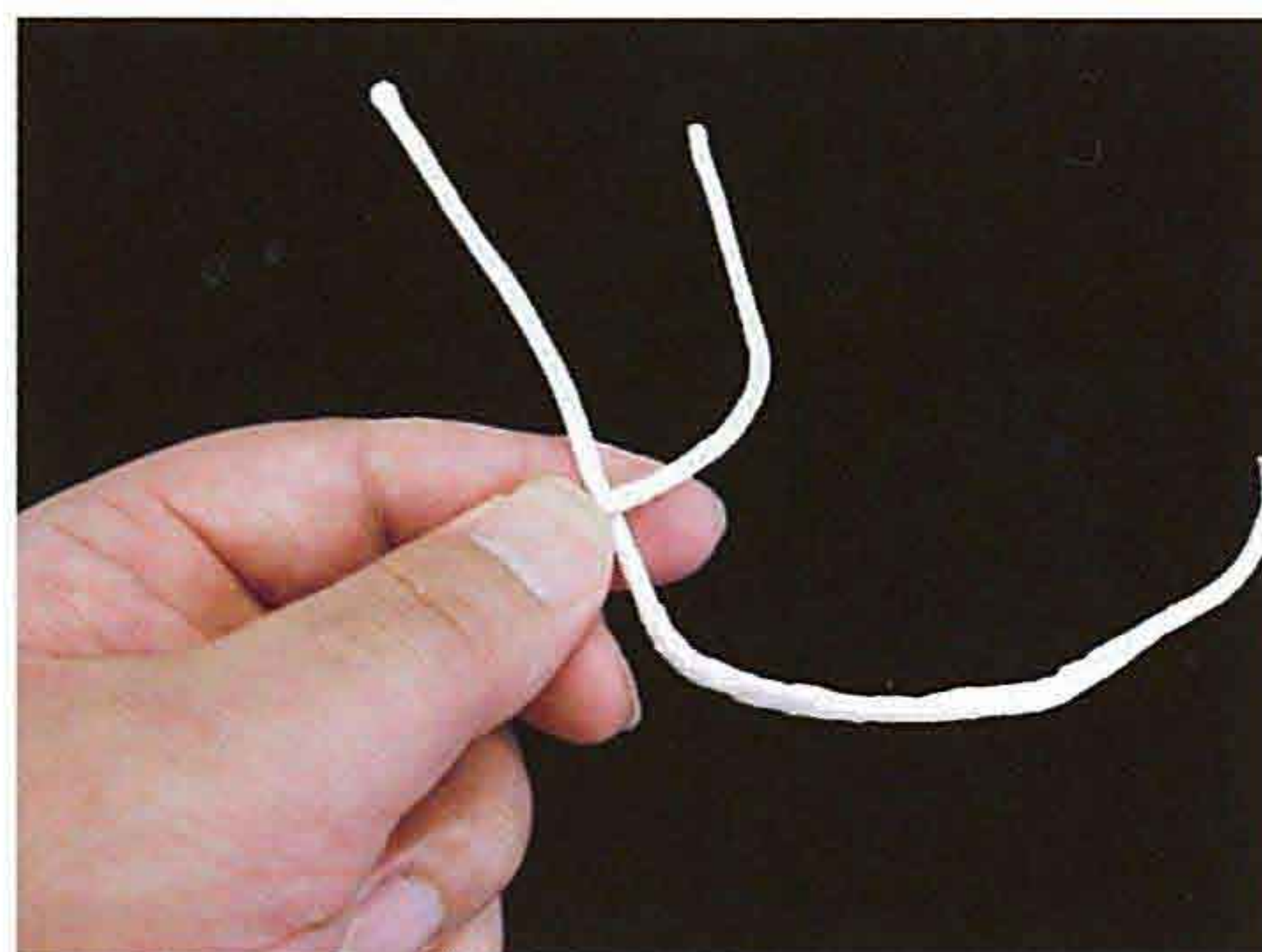


2：スゲコキが終了したら、ヨリコ（最も細いスゲ）でじゃまにならないように束ねておく。

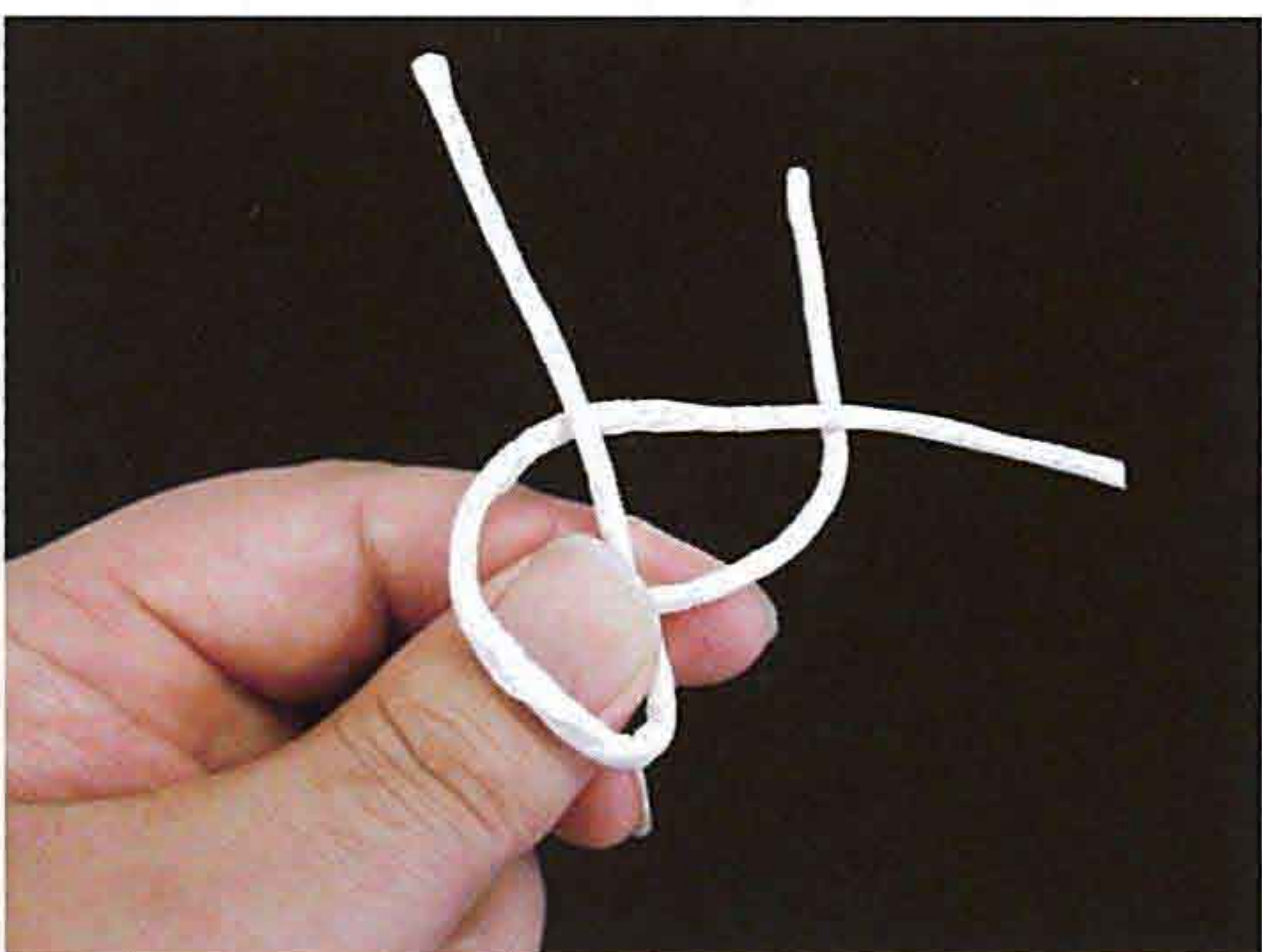
笠縫い 笠の表面を縫い上げていく



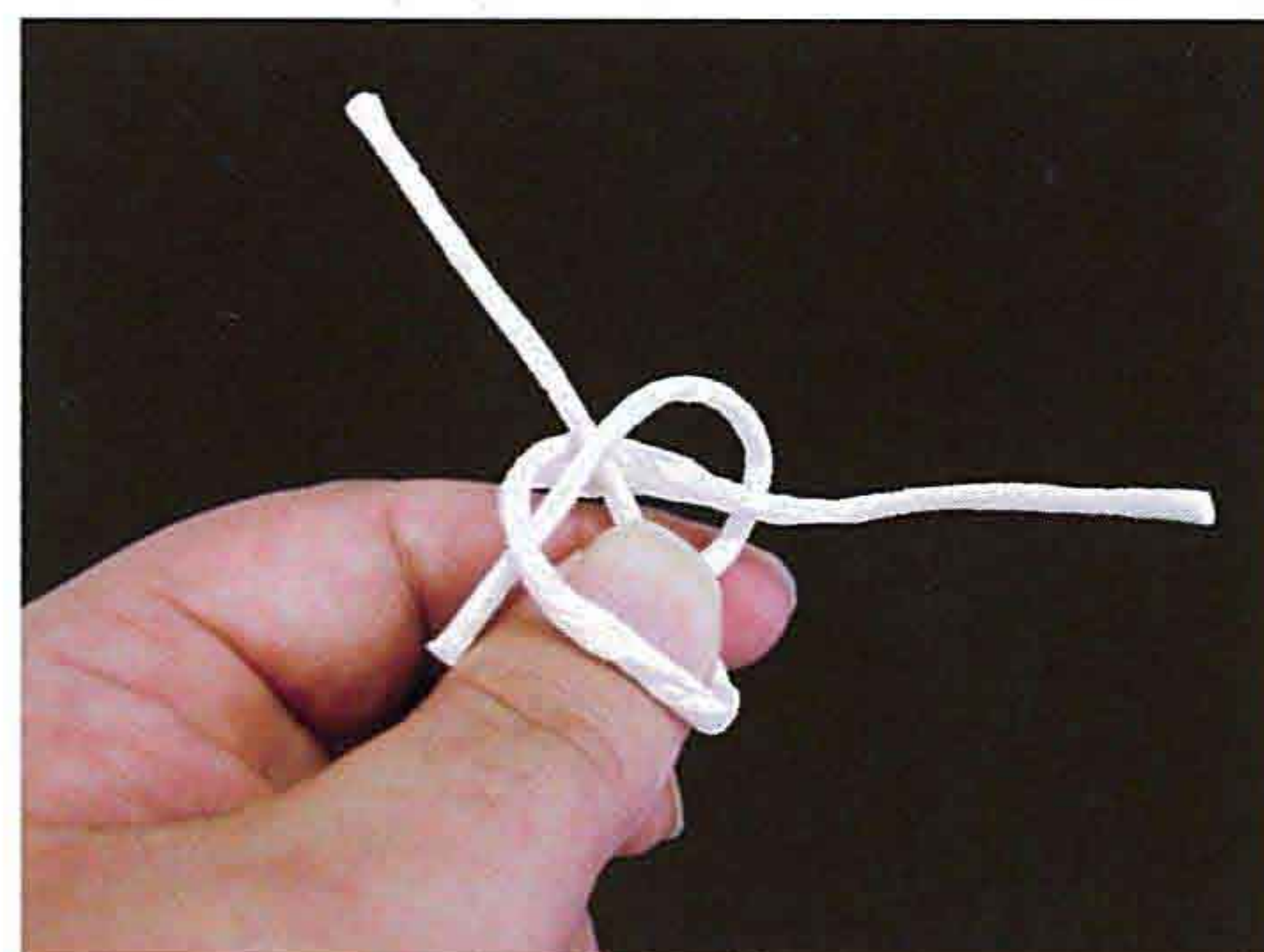
1：ノズケし終えた糸の先端とカサイトを結ぶ。



2：糸の結び方（女結び）①



3：糸の結び方②



4：糸の結び方③

ココが
ポイント

針は、スゲの表面のみをすくいとり
ましょう。



5：結び終えた糸はノズケしたオヤスゲを時計回りに10本ほど進んだところまで、内側に糸をまわす（シカケとオヤスゲの間）。



6：いよいよオヤスゲを縫いあげていく。スゲは、ガワボネから1cmほどのところから縫い進め、一本あたり一箇所ずつ縫い取っていく。



7：しばらく縫い進めた状態（徐々に上のほうに縫い上げていく。）。



8：縫いはじめの部分よりも上にずらしてぬいあげる。



9：2周目をしばらく縫い進めたところ（1周ごとに1cmほどずつ縫いあがっていく）。



10：半分ぐらい縫い進めた状態。



11：半分ぐらい縫い進めると写真のようにスゲとスゲの重なりが多くなってくる。適宜短手のオヤスゲを手でちぎって、少なくする。



12：スゲとスゲをなるべく広げ、重なりを少なくしながら縫い進める（写真のように少し手を沿え、起こしながら縫うと作業しやすい）。



13：縫い終わりは、写真にあるようなところまで縫い上げる。

ココがポイント 笠縫いの途中は、写真のように湿らせた手ぬぐいを巻いて、スゲの乾燥を防ぎましょう。



ズキドメ（シッタタン） 笠頂部の仕上げをする



1：笠を6等分するようにとらえ、2枚一組で6箇所先端を結ぶ。その他のオヤスゲは、縫い終わりのところをはさみで切り取る。



2：青色に該当するオヤスゲを写真のように折り曲げる①。



2：緑色に該当するオヤスゲを①の上に重ねるように折る②。



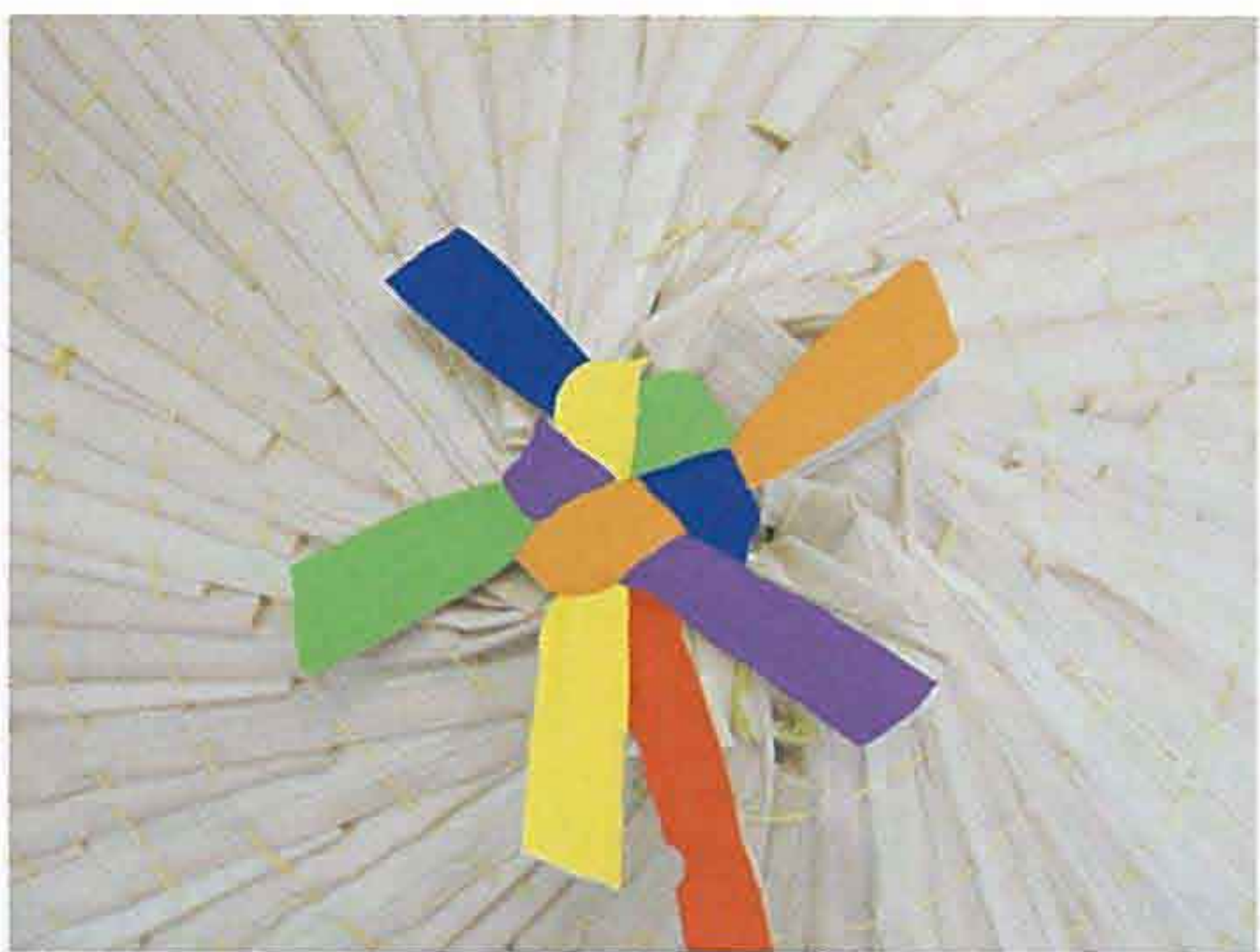
3：黄色に該当するオヤスゲを②の上に重ねるように折る③。



4：紫色に該当するオヤスゲを③の上に重ねるように折る④。



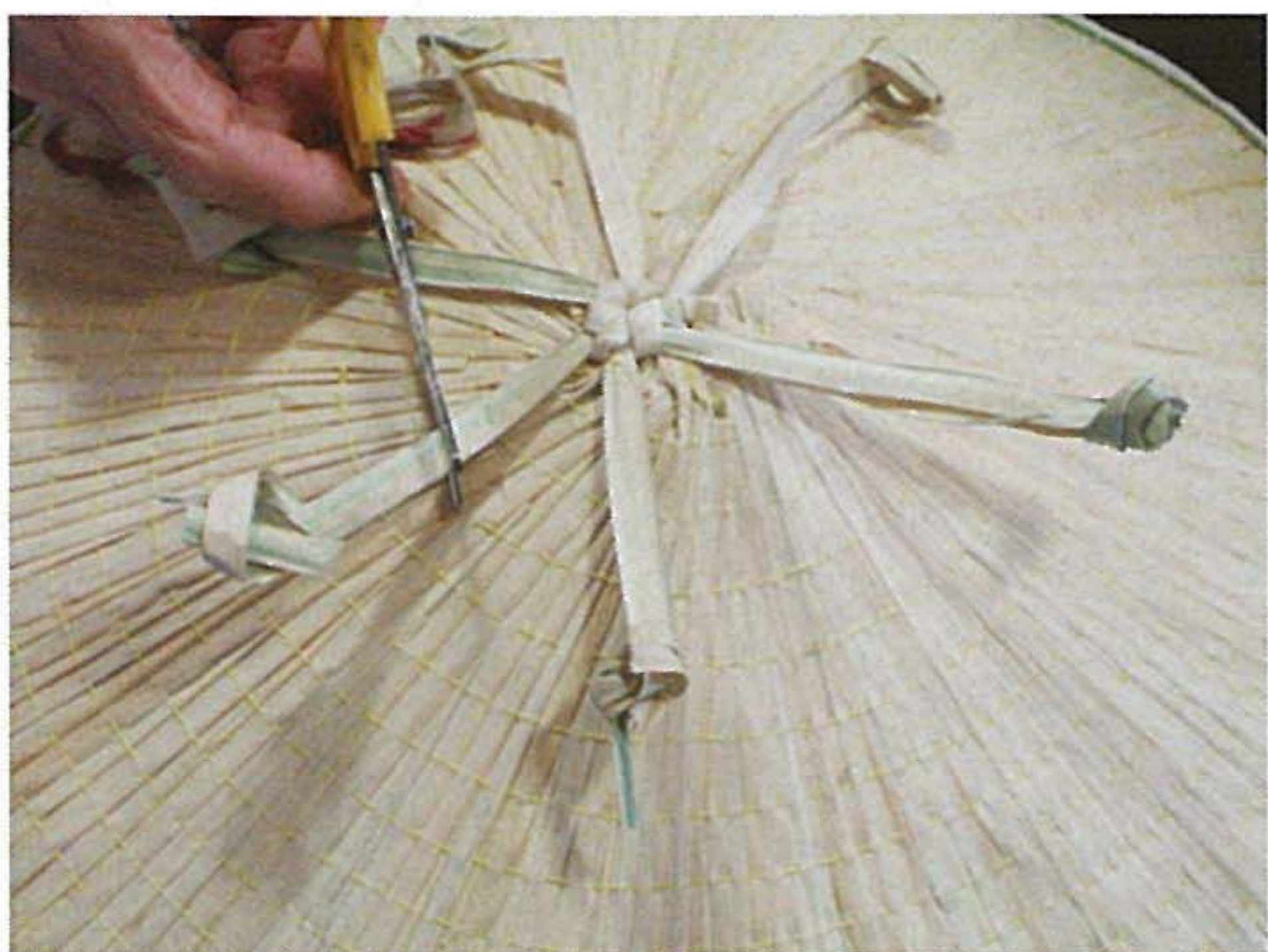
5：橙色に該当するオヤスゲを④の上に重ねるように折り、①の下をくぐらせる⑤。



6：工程①～⑤までが完了した状態。



7：赤色に該当するオヤスゲを折り、④の上に重ね、②の下をくぐらせる。最後に、全てのオヤスゲを絞込み結びとめる。



8：余分なオヤスゲを切り落とす。



9：ズキドメの完成したところ。



10：完成した角笠（外側）



11：完成した角笠（内側）

実際にかぶるには、五徳もしくは紐をコガワボネにとめる必要があります。

自分で育て、自分で縫った菅笠をかぶって野に山に川に出かけよう!!

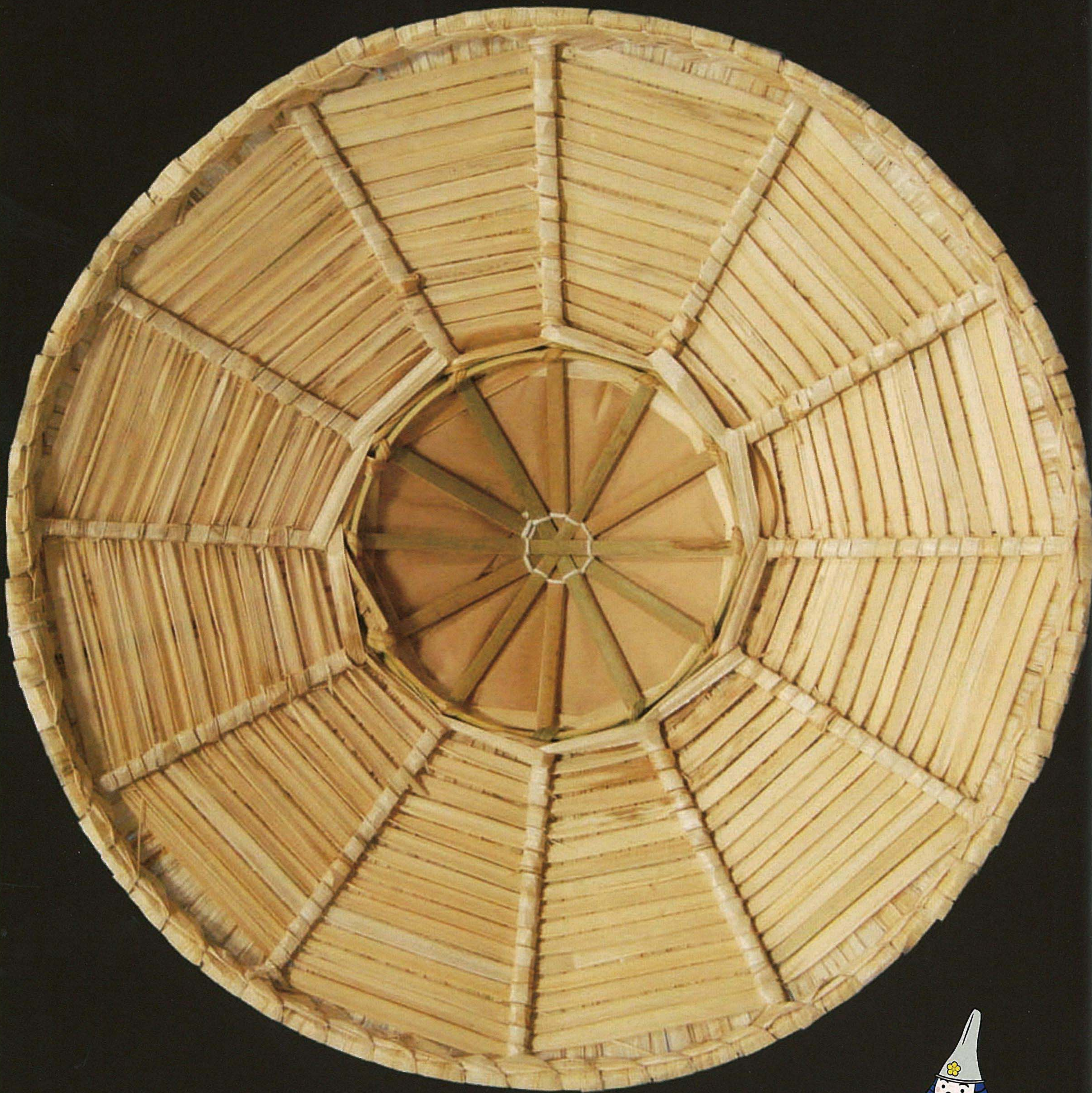


菅笠の作り方 ～角笠編～

発 行 高岡市教育委員会福岡教育行政センター
〒939-0192富山県高岡市福岡町大滝44

発行日 平成22年 3 月31日

印 刷 株式会社トーザワ



R100

